



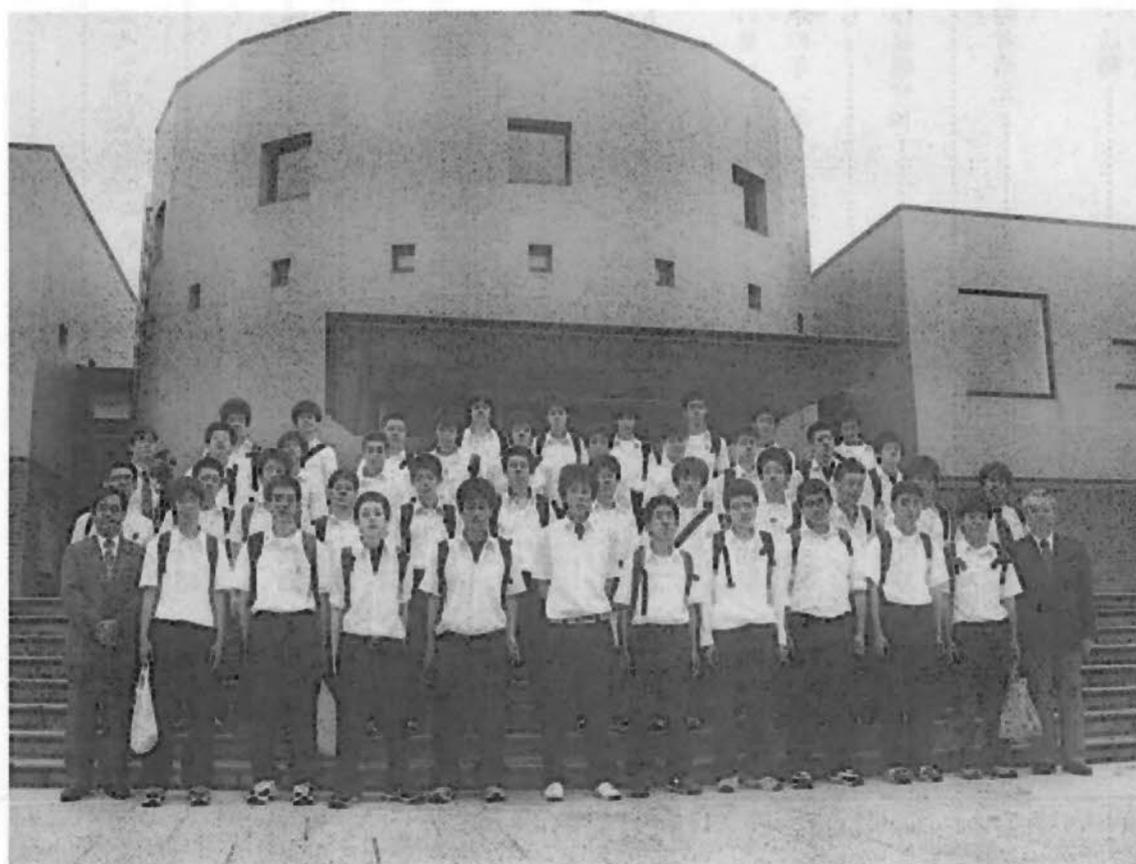
高崎高校同窓会報

2003

第37号

平成15年11月30日

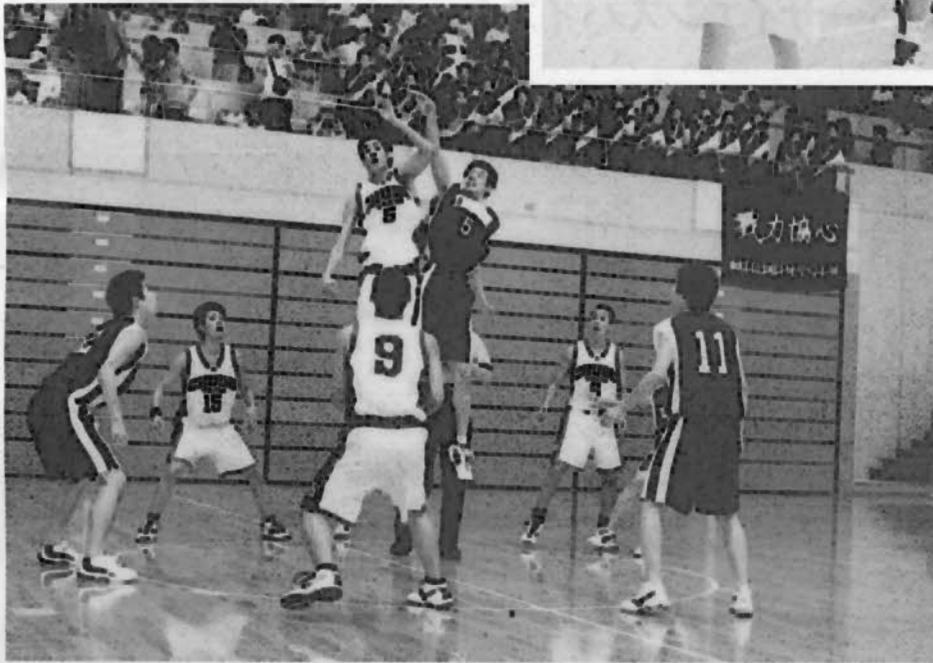
特集／SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の現状



GRAFH
FILE



2003年 全日本高等学校ソフトテニス選手権大会
(平成15年7月28日～8月24日)
入場行進するソフトテニス部員



平成15年度
全国高校総体男子バスケットボール選手権大会
(平成15年8月1日～7日)
1回戦 中部工業(沖縄)戦

高高同窓会 No.37 目次

あいさつ	あいさつ	同窓会会長 横田 英一 3
ごあいさつ	ごあいさつ	学校長 小林 克茂 4
不易流行	不易流行	同窓会副会長 原 浩一郎 4
論壇	論壇	
読書の話	読書の話	74期 佐藤 健二 5
特別寄稿	特別寄稿	
私の高中	私の高中	44期 大山 吉造 6
自由を満喫した三年間	自由を満喫した三年間	54期 佐々木章夫 7
母校の恩恵に感謝して	母校の恩恵に感謝して	64期 大嶋 誠 8
ライバル高の教壇より	ライバル高の教壇より	84期 森 英也 9
特集	特集	
●SSHの現状	●SSHの現状	10
海外の同窓生	海外の同窓生	
東南アジアに十六年	東南アジアに十六年	79期 藤江 修 12
同窓会だより	同窓会だより	
榎麓聖母会の集い	榎麓聖母会の集い	49期 友松 稔 13
卒業五十周年の年(五十二期同期会)	卒業五十周年の年(五十二期同期会)	52期 岩崎 允彦 13
同窓会本部から	同窓会本部から	14
●卒業生の作品紹介(19)	●卒業生の作品紹介(19)	60期 福田 篤 15
●翠情文庫	●翠情文庫	15
●表彰・叙勲者紹介	●表彰・叙勲者紹介	15
母校だより	母校だより	
各部の活躍・活動	各部の活躍・活動	16・17・18
第五十七回定期戦	第五十七回定期戦	19
最近の進学状況	最近の進学状況	19
人事異動	人事異動	19
同窓会会計報告、新年総会案内、ゴルフコンペ報告、編集後記	同窓会会計報告、新年総会案内、ゴルフコンペ報告、編集後記	20



いあじろ

同窓会会長 横田 英一

観音山の木々があざやかに色づいています。晩秋の冷たい雨に打たれて、高高の銀杏並木もそろそろ黄葉する季節となつてまいりました。十一月十三日には、校内マラソン大会が開催されました。観音山を一気に駆けのぼるこのレースでは、在校生九百有余名それぞれが、日頃の鍛錬の成果を発揮しました。

同窓の諸兄におかれましても、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。毎年のごとながら各界・各方面における諸兄のご活躍を見聞することが多いのですが、同窓会といえども誠に心強く、ご同慶の至りであります。皆様のご活躍や要望にこたえるべく、同窓会でもさらに充実した活動を展開してゆく所存であります。

例年、この会報の紙上で私がお願い申し上げている維持会費の納入につきましても、今年度は特に大勢の会員のご協力をいただくことができました。皆様の、同窓会に寄せる熱い思いをひしと感じた次第であります。

同窓生の皆様の絶大な御協力により、翠巒会館の建設、指月庭の整備、百年史の刊行などの諸事業を実施して、母校創立百周年をお祝いしてから、すでに六年が経過しましたが、

百十周年の節目が近づいてまいりまして、それをどうお祝いするか考えなくてはならない時期を迎えております。現在のところ学校からの特別な要請はなく、施設、設備も整っておりますので、大きな事業を行うことは考えはおりません。

百十周年の節目をどうお祝いするかについては、今後同窓会の皆様方より御意見や御教示をいただきながら、具体的に検討させていただきます。と考えておりますので、よろしくお願いたします。

今年を振り返りますと、本校卒の職員植原政明氏が七月に逝去されました。高崎高校創立百周年記念事業の一環として、平成十年に発行された「高崎高校百年史」。その人物編「翠巒の群像」の編集長として活躍された氏のご冥福をお祈り申し上げます。

さて、日本の教育改革がマスメディア等で頻繁に取り上げられている現在、大学生がほとんど勉強することなく卒業していくという事態やその学力低下が問題にされています。子どもたちや若者に、学ぶためのインセンティブ(誘因)が欠けていることが大きな原因と思われれます。生きていくことに楽しみの幅

を与えてくれる知識、それをどんな学問や経験から得るのが最も自分らしいのか、誰もが一度は深く考えてみる必要があります。また、人生が選択の連続だとすれば、そのときどきに決断をくだす勇氣と知恵がなければなりません。「生きる」とはどういうことかを知るために、私たちは自問自答すると同時に、他者と語り合う必要があるのです。

高崎高校ではそのような場として、一年次に「社会人講師授業」、二年次に「企業・研究所・大学訪問」を実施しております。十一月七日に実施された「社会人講師授業」では、十名の講師が来校していただきました。その中の六名は高高の卒業生です。在校生に広くインセンティブを与えてくださいました。

同窓会といえども、高崎高校の発展をここのほか願うのは勿論のことです。それが、それに加えて勇氣と知恵をそなえた「男」の育成を支えていく所存であります。今後とも同窓諸兄の心強いご支援をよろしくお願ひ申し上げます。

(群馬トヨタ自動車株) 代表取締役社長 50期



いあいさつ

学校長 小林 克茂

同窓会報第三十七号の発刊を心からお慶び申しあげます。高高に赴任し三年目を迎え、私の教職生活も残り僅かとなりましたが、残任期間を精一杯全うしたいと考えています。

同窓会の皆様には、常日頃から学校運営に対し、物心両面にわたり多大なご支援・ご協力をいただいておりますことに、深く感謝申し上げます。お陰様をもちまして、本校の教育活動は順調に推移し、生徒は勉強に部活動に毎日元気に精を出しています。本校の進路状況を初めとする学習活動の様子は、会報後半にある「母校だより」に詳しく掲載されておりますので割愛させていただきますが、高高の良き伝統である文武両道の教育方針を守り、頑張る所存でありますので、今後とも宜しく願っています。

今年、まず初めに残念な報告をしなければなりません。七月十六日に同窓生である植原先生がお亡くなりになりました。一昨年腎臓を患いましたが、昨年は元氣を取り戻し、これからという矢先の病の再発で残念でなりません。特に、先生の高高に対する思いは熱く、常日頃から励ましを受けていた私にとっては大きな支えを失った気持ちで一杯です。また、先生は同窓会の仕事や応援団の顧問としても大きな貢献をしてくださいました。同窓の皆様とともに、

植原先生のご冥福をお祈りしたいと思います。

次に、今年も部活動は頑張りました。県高校総体の二年連続総合優勝を初め、バスケットボール部が四年ぶり、ソフトテニス部が二十一年ぶりにインターハイに団体出場し、個人戦でも柔道部、陸上部が出場しました。また、全国大会出場に際し、翠樹体育会を始め、関係各方面から浄財を沢山いただきました。物心両面にわたるご支援・ご協力に對しまして、この場をお借りし、重ねて感謝申し上げます。

また、スーパーサイエンスにつきましては、お陰様で順調に推移し、一月には遠山前文部科学大臣、三月には県議会「子ども未来特別委員会」、七月には県議会「文政治安常任委員会」が視察に来校しました。計画が順調に推移している証と学校も喜んでおります。この企画は三年計画であります。生徒の熱心さを考えますと、学校としても今後の成果に大きな期待を寄せています。

終わりに、今、様々な改革が進められておりますが、教育界にあっても同じであります。高高にとつて、何が不易で何が流行かを見間違ふことなく学校運営を進めていくことが求められております。

今後も同窓諸兄のご指導ご助言をお願いし、あいさつといたします。



不易流行

同窓会副会長 原 浩一郎

日本語が危ない。指導者(特に政治家)の言葉のなんと荒れてまた軽いか。言葉の衰弱が、我々が何となく感じている将来への不安を広げ、危機感を深化させている。

それに加えて外来語の氾濫。新聞紙上にもやたらとカタカナ文字が目につく。マニフェスト、トレーサビリティ、コンプライアンス。何故、政権公約、生産管理、法令遵守ではいけないのだろう。英語力の充実、大切さが盛んに言われる中で、国語力の重要さと素暗らしさが忘れられようとしている様に思えてならないのである。

自分の国の国語を、正しく理解しない国民から愛国心は生まれえない。愛国心や国旗の掲揚が常に話題となるが、つきつめて行くと、小中学生の国語の基礎学力の徹底した学習が不足しているのではないかと考える。今の二倍も三倍も国語の授業を増やすべきではないか。英語の重要性を勿論否定するものではないが、一位の国民が全て英語に堪能になる必要はないのであって、必要なのは国語の持つ日本独自の素暗らしさを深く理解することではないかと思う。

例えば、日本人の持つ独特の季節感から生まれた世界一短い詩である俳句。この短い十七文字の中に隠された深い味わいを、小中学生時代の感性の豊かな時に

もっと教えるべきではないかと考える。

四十九期卒業の、前群馬銀行会長五十嵐哲夫先輩が、エッセイ集「ちよつと言」の中でことばの乱れについて触れられている。「最近面白い注意書きをみつけた。『犬の糞を絶対させないで下さい』と言うのである。一見何でもない様にみえるが、『犬の』は『犬に』が正しい」と述べ、「外来語の氾濫、新人類言葉など、日本語の乱れが言われているが寒心に耐えない」と書かれている。また、「某ラジオ局の女性アナウンサーが、『土踏まず』を『足踏まず』と放送していた。何をか云わんやである。」と指摘されている。全く同感であります。

先日、五十五期卒業の石田建材工業会長の石田安利先輩から良い話を聞いた。日本語の奥深さに関連して、「例えば、『しんこう』という言葉を耳で聞き文字に直してみると、『親交』や『深耕』を始め何と三十三の熟語がある。世界中、この様に想像をたくましくさせる国語を持った国民はいない」と。広辞苑を引くと正に三十三の熟語がありました。

不易流行という言葉があります。今こそ変えるものは大胆に変えて行くと共に、絶対変えてはいけない基礎基本の重要性を考える時ではないだろうか。

(群馬県肥前料協会展長)

論壇 読書の話

佐藤 健二



「今の立場からの現在の社会情勢に対する意見」というのが依頼の趣旨であった。だから読書の話をした。これは、ぼく自身の「立場」である。高校時代を含めて今日まで、ぼくにとって「書物」は、考えるという経験の作法を教えてくれた、大切な遊び場であり、時にウソもつけば泣かせてもくれる、一筋縄ではないかなしたたかな友達だった。

読書は大切な価値があるといわれる一方で、書物の上ではかなり勉強してはいけない、現実を体験しなければいけないという。しかし飛び込んで体験すれば、常によりよくわかるのかというと、これがそう簡単ではない。書物を読むのに、文字の知識と読解力が必要であるのと同じように、じつは体験の現実から学ぶためには、独自のリテラシー（読んだり書いたりする能力＝読解力）が必要である。その読解力は、いかにして身につけることができるのか。どうどうめぐりの解答のように聞こえるかもしれないけれども、読むという身体をかけた実践を通じてしか身につかない。書物が作っている「森」のようなことばの世界は、そのよいレックスン場である。

他人の頭をぶったためだけの書物の利用は、これまた卑しい。書物の宇宙が教えてくれるのは、もうすこし別な作法である。一つの書物には、さまざまな扉があつて、他のさまざまな書物につながっている。扉となることばは、「テロリズム」でも「友愛」でも何でもよい。疑問をもちさえすれば、扉は開けることができる。つまりことばは、時空間に張り巡らされたワームチューブのようなもので、それをたどって、ぼくらはこれまで知らなかった世界を旅することができる。書物は過去が刻み込まれたタイムマシンであり、青く輝く地球を見わたす宇宙船であり、多くの端末をもつゲーム機である。そんな複合的な機能をもつ装置を使つての想像力の旅を、ぼくらは「読書」という貧弱で堅苦しいことばに閉じこめてきた。

もう書物の時代ではない、という人もいる。これからは液晶画面だという。なるほど印刷物という発明が、それが作り上げた文化ともども、電子テクノロジーとの出会いのなかでどう変容するかは、見えないだけに面白い課題である。どんな可能性をわれわれの社会が見いだすか、見届けていきたいとも思う。しかし紙の本の消滅を宣言するまでには、長い共存の過渡期が続いていくだろう。まだ印刷物と電子文字の世界は、リテラシーの身体性において二つに分かれていて、全面的に重ねあわせられるほどの融合を示していないからである。

「森」の価値ある「教養」だけを手に入れようと書物に向かうのは、「トリビア」な知識を競うための読書と同じく、すぐに力

尽きてしまう。見知らぬ権威を持ち出して、他人の頭をぶったためだけの書物の利用は、これまた卑しい。書物の宇宙が教えてくれるのは、もうすこし別な作法である。一つの書物には、さまざまな扉があつて、他のさまざまな書物につながっている。扉となることばは、「テロリズム」でも「友愛」でも何でもよい。疑問をもちさえすれば、扉は開けることができる。つまりことばは、時空間に張り巡らされたワームチューブのようなもので、それをたどって、ぼくらはこれまで知らなかった世界を旅することができる。書物は過去が刻み込まれたタイムマシンであり、青く輝く地球を見わたす宇宙船であり、多くの端末をもつゲーム機である。そんな複合的な機能をもつ装置を使つての想像力の旅を、ぼくらは「読書」という貧弱で堅苦しいことばに閉じこめてきた。

たぶん発想を転換する必要はある。新しい学問が書物によって普及したのではなく、書物という形での知識の共有がじつは科学を含む学問を生み出していったのである。テレビはようやく五〇年を過ぎたが、流れ去っていくだけの存在を抜け出て、過去の番組や報道を蓄積して参照できるアーカイブス（一種の図書館のような公共的な仕組み）を語り始めたのは、ほんの数年前のことではない。その点では、テレビが生産した情報は、まだ多くの人がデータを共有し、その意味を検証し、批判的に議論する場、すなわち「学問」生成の場を生み出してはいない。

第二に、問いもまた自分で問うもので、答えもまた自分で探すものだということは、誰でもわかっているさというだろうけれど、さてその境地をどこまで楽しめるか。それを楽しむ覚悟は、ちよつと孤独だけれど自由なものである。

価値ある「教養」だけを手に入れようと書物に向かうのは、「トリビア」な知識を競うための読書と同じく、すぐに力

尽きてしまう。見知らぬ権威を持ち出して、他人の頭をぶったためだけの書物の利用は、これまた卑しい。書物の宇宙が教えてくれるのは、もうすこし別な作法である。一つの書物には、さまざまな扉があつて、他のさまざまな書物につながっている。扉となることばは、「テロリズム」でも「友愛」でも何でもよい。疑問をもちさえすれば、扉は開けることができる。つまりことばは、時空間に張り巡らされたワームチューブのようなもので、それをたどって、ぼくらはこれまで知らなかった世界を旅することができる。書物は過去が刻み込まれたタイムマシンであり、青く輝く地球を見わたす宇宙船であり、多くの端末をもつゲーム機である。そんな複合的な機能をもつ装置を使つての想像力の旅を、ぼくらは「読書」という貧弱で堅苦しいことばに閉じこめてきた。

学問を自分の職業として選んだ者として、たとえば大学や大学院へ進んで勉強しようとした時に、思い出してほしいことを添えておく。

第一に、一つの問いに一つの正解があるような読みかたから解放されること。

（東京大学大学院 人文社会科学系研究科助教授 74期）

私の高中



特別寄稿 大山 吉造

私達四十四期生は、昭和十五年四月に高中に入学した。この前年、上和田の校舎から乗附へ移転したばかりで、講堂は未完成、雨天体操場での入学式だった。学校の周りは長閑な田園風景で、蛙の大合唱が聞かれた。

この年から入学定員が五〇名増加して、二〇〇名となった。このため、先生方からはお前達の中の五〇名は高中生ではないと、ことある毎に馬鹿にされた。

我々は、支那事変から大東亜戦争、敗戦へと激動の時代に高中五年間を過ごした。その間、夏休み期間の短縮、夏秋の農繁勤勞奉仕、六里ヶ原開墾、学校周辺休閑地の開墾、千葉保田海岸にて海洋訓練、そして最後は、昭和十九年七月から、岩鼻火薬廠、小島鉄工所、磯部金属への勤勞動員となり、以後、卒業まで工場で働いた。誠に、波乱に富んだ高中時代であった。それでも、低学年の頃には、未だ戦況もそれほどではなく、楽しい部活動が過ごせた。私は野球部に入った。

戦局は次第に深刻化し、大東亜戦争突入後は、当然のこととして各種

部活動は、縮小または廃止を余儀なくされた。野球も例外でなく、昭和十六年全国中等学校野球大会（現全国高等学校野球選手権大会）県予選を最後に中止となった。

ところが、非常時こそ国民の士気向上はスポーツだと、中止された野球が翌昭和十七年、文部省、学体育振興会主催で全国中等学校野球大会が開催されている。この事実は高校野球の記録にはない。この幻の甲子園について紹介しよう。

群馬県予選は八校（高崎中、前橋中、伊勢崎工、太田中、桐生中、伊勢崎商、桐生工、高崎商）が参加して、七月二十五日から四日間前橋敷島球場で開催された。本大会では中等校新球使用、従来の罌間、本罌間の短縮、スパイクの使用禁止、出場者の年齢制限等の規則変更があった。

▼群馬県予選戦績

一回戦 高中17 〃 2 前中
準決勝 高中23 〃 0 太中
決勝 高中3 〃 14 桐中

桐生中、高崎中は北関東大会に出場。北関東地区予選は、全国大会出場権をかけて、八月七日より明治神宮外苑野球場で北関東八代表（川越商、

桐生中、茨城工、宇都宮中、下野中、水戸商、高崎中、大宮工）が競った。

▼北関東予選戦績

一回戦 高中2 〃 1 大宮工
準決勝 高中0 〃 9 水戸商
決勝 水戸商4 〃 0 桐生中

こうして、各地区予選に勝ち抜いた、全国の精鋭十六校が甲子園球場に集い、昭和十七年八月二十二日より、全国大会が、華やかに幕を開けた。栄冠は徳島商業の頭上に輝いた。しかし甲子園大会の歴史に、徳島商業の優勝は記されていない。

今では本大会は、幻の甲子園、歴史から消えた甲子園と、当時を知る者のみにより語り継がれている。私はこの大会に出場できたことを、人生無上の誇りに思っている。

最後に皆様のご健勝をお祈りします。
(元上信電鉄取締役 44期)



私は、現在、東京演劇アンサンブルという劇団に所属して、俳優と制作の仕事をしている。この劇団は、優れた指導者に導かれ、日本演劇界でも独得の演劇論をもっていることで知られ、来年には創立五十周年を迎える集団です。

私はこの劇団に入団して三十三年目、演劇の仕事始めてからは四十六年になる。そのきっかけと、土台が造れたのは、高高在学中の三年間が大きな影響を与えてくれたからだと思います。

一九五二年、火災後復興された高崎高校へ入学した。最初の志望校と将来の目標のアンケートには、一橋大学と実業家と記した。それが、演劇部の新入生歓迎公演で、「鈍」という芝居を観せられたことと、中学時代に好意をもっていた女性が、高女で演劇部に入部したということを知っていたこととで、ためらうことなく演劇部へ入部した。もともと映画大好きな映画少年だったが、これが幸か不幸か私の人生を決定づけることになってしまった。

特に一生の仕事を決定的にしたのは、高高三年の一九五四年、高崎を中心に行われた映画「ここに泉あり」の撮影に参加したことだった。今井正監督で制作に映画評論家の岩崎昶氏と、高高先輩の市川喜一氏がたずさわっていた。

自由を満喫した 三年間



特別寄稿
佐々木 章夫

私は、市川氏に撮影に参加させて欲しいと手紙を書き、快諾を得た。夏休みに入ると同時に手伝いを始め、当時高高は二期制で、九月中旬には前期期末試験があったが、担任の許可を得て試験前日まで撮影現場で仕事を続けた。

映画制作を実際に体験して、映画の仕事をやりたいという意欲は益々強くなった。後日談だが、卒業後、今井監督は、まだ青二才の私と二人だけで二時間位会ってくれて、映画志望の私の話を聞いてくれた。が、生活の目処が立たず、映画の仕事は泣く泣く諦めざるをえないという辛

い体験もした。

演劇部は部員は多くはなかったが、よき先輩・後輩にめぐり会い、人生について語り合うなど楽しい時があった。三年になって、芝居好きの高橋信男先生が推薦してくれた、「乞食の歌」を公演、外部から日比谷高校休学中の女性に参加してもらっての舞台は楽しかった。とにかく女生徒はいない学校だったから、美人の客演者を見たい見物者は稽古中から絶えなかった。国語の中島先生からは、お前はプロとして役者で食えるという言葉も貰った。

また三年の時、現役での大学受験

を、財政的な問題などで諦めていたこともあって、翠巒祭実行委員長も引受けた。前夜祭と街中の提灯行列の計画を立て、田中悦平校長に許可を求めたが、前夜祭だけ許可された。前夜祭では、キャンブファイヤーを囲み、各文化部々員たちが大声で歌を唄った。長として歌を所望され、歌の選曲にクレームをつけた顧問に対する腹癒せに「赤旗の歌」を唄ったりもした。打上げに田中校長を招いて交流をしたりしたこともあって、卒業時、校長の著書「高校生の倫理」出版のきっかけもつくられた。

先日、同期の彫刻家、半田富久君の作品を指月庭に設置時、久し振りで母校を訪問した。井上房一郎氏と私が、六本木の俳優座劇場へ行き、舞台機構を見てそれを参考にして、五十四期が卒業記念に造った舞台を残した講堂はなくなっていたが、自由を満喫した学園生活は懐かしく、母校の健在を確認した。

(俳優 54期)

母校の恩恵に感謝して



大嶋 誠

特別寄稿

同期の広田誠四郎君から突然電話があり、「同窓会報」に一文寄稿せよとのことであった。思いもかけぬ依頼であったが、懐かしい声に二つ返事でお引き受けすることにした。

私が安中中学校を卒業し、高高に入学したのは、一九六二年（昭和三七年）四月。もう四十年も前になる。下駄履き、肩掛け鞆に二本の白線入り帽子の「高高ルック」で通学したのが昨日のことのようでもあるし、遠い遠いことのようにもある。

母校を卒業後、大学に進み、フランス語と西洋史を学んだ後、九州の地に職を得てからは、実家に帰省する回数も減り、帰省しても先祖の墓参りをし、実家の家族が元気でいることを確認するだけで、また九州へと戻ることになる。そうしたわけで、旧友たちにはご無沙汰ばかり、同窓会の案内を手にしても、「出席できず残念」と返信するのみである。

だが、帰省のおり、安中への車窓から観音山と高崎観音が見えると、高高時代が自ずと思ひ起こされ、しばし、あの頃と対面する。帰省するさいの楽しみの一つである。私はいわゆる「汽股通」の一人で

あった。安中駅から列車に乗り、高崎駅から聖石橋を渡り、石原から畦道まがいの細い道を歩いて通学した。行きはひたすら遅刻せぬよう歩いたが、帰りは同じ汽股通の仲間と語らいながら、駅に向かった。豊かな時間であった。

今思い返してみると、在学時の母校は、いい意味で旧制中学校の雰囲気色濃く残っていたように思える。仲間の多くは一見バンカラではあるが、友人思いで、意気軒昂、志が高かった。

そして、校長の田中悦平先生をはじめ、先生方は個性的であった。漢文の鈴木先生、物理の田島六十勇先生、英語の網中先生、世界史の中村先生、国語の豊浦先生、美術の塚田先生などなど。お名前を挙げてみると、教壇に立たれている姿が蘇ってくる。

今にして思えば、先生方が豊かな学識をお持ちであったのはもちろんであるが、お一人お一人が、型にとらわれない、自由闊達な精神の持ち主であった。薫陶を受けた先生のうち何人かは、すでに他界されている。この紙面をお借りし、あらため

てお礼申し上げ、ご冥福をお祈りしたい。

在学時の高高の教育は、生徒の目を広く世界に向けさせようとする意図が見られたと思う。その代表例が、各界のトップに位置する著名人をお招きしての講演会であった。今でこそ、こうした企画は一般的であるが、当時としては、きわめて先進的な試みであった。ノーベル賞受賞者の湯川秀樹博士の講演会、茅誠司博士の講演会は、それに列しただけで感動のものであった。講演の内容が理解できたかどうかは別として、「世界を代表する知性」の警咳に接すること、世界を身近に感じ、勉学への刺激を受けたのは間違いない。

高高のよき師、良き友、広く世界を見据えた教育方針が、今ある私の出発点であることを実感するし、卒業してから今日に至るまで、高高の卒業生であることを誇りに思っている。

母校の恩恵に浴した一人として、「伝統よさらに榮えあれ、未来よ燦と輝け」と祈らずにはおれない。

（大分大学教授 教育福祉科学部長 64期）

幸運にも昨年の四月より前橋高校に赴任しています。こちらには私が高崎高校三年在学時に担任として大変お世話になった児島修先生が教頭先生として居られます。また、当時級友の五十嵐健一君、信越線で共に通学した徳江和彦君とも、今度は職場の仲間として再会を果たしました。このような状況になってみると、いかに高高での縁が生涯大切であるかということ、改めて痛感する次第です。

その前高での生活ですが、否応なしに母校のことを意識させられる毎日です。たとえば定期戦が近づくと、毎日のように配布される定期戦通報の中に「撃滅！高崎！」の文字を見せつけられることとなります。さらに定期戦実行委員の生徒がHRにやってくる「撃滅！高崎！」と叫んでいきます（今年は高高の勝利に終わりましたが）。今更ながら、なぜこれほど近くにこれほど似通った気質を持つ高校が存在し得るのか、不思議でなりません。両校も全く恵まれた環境にあると言えます。

さて、私は高高で郷土部に在籍していました。当時は「実験考古学」と銘打った、体験型の古代史研究を行っていました。自分たちで土器を作って焼き上げ、完成した土器を使い炊飯・調理等の実験を行いました。年に一度、翠巒祭で発表することを

ライバル校の 教壇より



特別寄稿
森 英也

何よりも楽しみにしていたものでした。私自身は郷土部での活動で精一杯だったので、他の部活の研究発表を事細かに見ることはできませんでしたが、各部ともとても気合いの入った、素晴らしい発表をしていたと記憶しています。

今年の前高の蛟龍祭でも同様に、生徒たちは気合いを入れて数々の素晴らしい発表を行いました。ただ、研究型文化部の発表については残念ながら、あまり数は多くありませんでした。そのような文化部の数が少なくなってしまうようなのです。高高ではどうなのでしょうか。

聞くところによると高高では運動部の加入率が80%を越えているとのこと。それはとても素晴らしいことです。ただその反面、私達が行っていたような活動をする部活動が少なくなっていくと少々寂しい気もします。高高や前高のような学校だからこそ研究型の部活動が存在し得るとさえ思っています。前高での研究型文化部の衰退を見ると、どうしても思いはそこに行きつきません。

その一方で素晴らしい経験もしました。現在は前高で音楽部の顧問をしておりますが、高高合唱部との合同発表を何度かさせていただきまし

た（丸橋先生、大変お世話になりました！）。お互いに部員数は少ないのですが、合わさると大合唱団に変貌するのです。お互いの存在が大きな力になっていけると感じる瞬間です。いずれにせよ、このような形で母校と接触ができることは大変光栄なことと感じると同時に、このような経験ができる生徒たちは本当に幸せだと思います。

両校がいろいろな意味で接近して、強くライバル意識を持つこと、そしてその意識は時代が変遷しても脈々と続いていること。これは両校にとって何物にも替え難い財産だと思います。両校の発展には常にお互いの存在が支えになってきた部分があると思います。

伝統のライバル関係よ、更に栄えあれ!!

（県立前橋高等学校教諭 84期）

特集

指定より2年を経過したSSH その現状を報告する

平成14年度、科学技術系人材の育成を目的として、文部科学省が実施を始めた「スーパーサイエンスハイスクール（以下SSH）」事業において、母校高々が指定されて2年が経過しようとしている。

現在までに、新聞紙上などマスコミにも取り上げられており、同窓諸兄の中にも、この新しい取り組みについてご存じの方も多いことであろう。しかし、詳細については、なかなか聞き知る機会も少ないのではないかと思います。今回の特集においては、現在までの活動状況を中心に、その概要をお伝えしたいと思います。

SSH指定の意義

高々では、同窓諸兄もご承知のように、「文武両道」を教育目標に掲げ、「将来、社会の各方面で活躍しうる人間の育成」を念頭に、大学の先にある社会を見据えての進路指導を続けている。その指導の一環として、一年生では、ボランティア体験学習、社会人講師による授業を、また2年生では、企業研究所大学訪問旅行を実施している。これらの諸活動において、多くの同窓諸兄の御協力をいただいております。この紙面を借りて御礼申し上げます。

さて、以上のような教育実践と照らし合わせたとき、日本社会・経済発展の根幹を担う、科学技術系人材の育成を目的とする「スーパーサイエンスハイスクール」事業は、高々の教育活動の新たな柱となるものと考えられる。

研究開発課題と目的

SSHは、大学、研究機関等との連携を図り、科学技術系人材育成のための教育方法に関する研究開発を課題とし以下のような目的を定めている。

科学技術は、日本経済の成長と構造改革を支え、希望ある未来を切り開く原動力であり、「科学技術創造立国」の実現に向けては、日本の将来を担い、世界に貢献できる質の高い科学技術系人材を育成していくことが急務である。

科学技術の水

準を引き上げ保持する能力を有した人材を育成するためには、教育の早い時期から生徒に対して科学技術への興味を引き出し、科学的な見方や考え方を養成することが極めて重要である。将来にわたって科学技術に積極的に関わろうとする情熱と意欲を持った生徒の育成を目指す。

具体的な取り組み

以上の目的を達成するために、指定2年目を迎えた今年度は、一年生2クラス、二年生1クラスのSSHクラスを設定し、それぞれ以下のような取り組みを行っている。

1 ◆ 先端科学講座

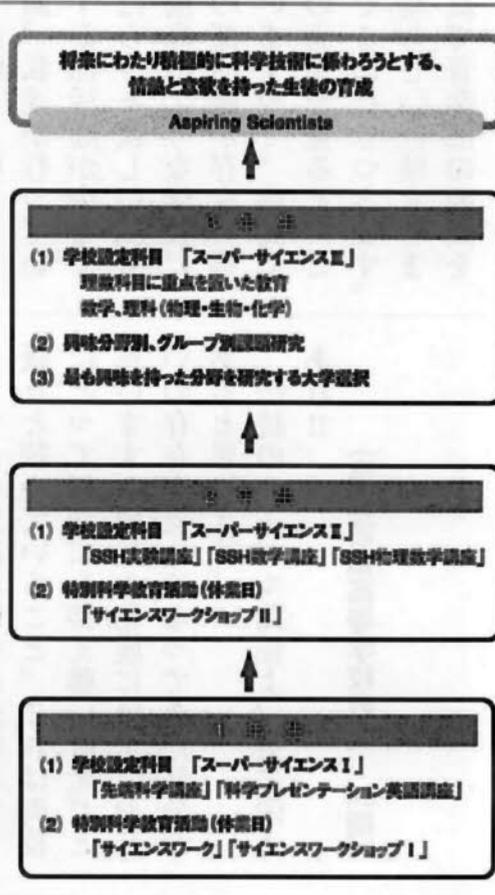
○各分野の第一線で活躍している研究者を招き、先端科学技術の講義や、実験・実習を通して、科学技術に対する知的好奇心や探究心を深め、科学技術研究への情熱と意欲を育成する。



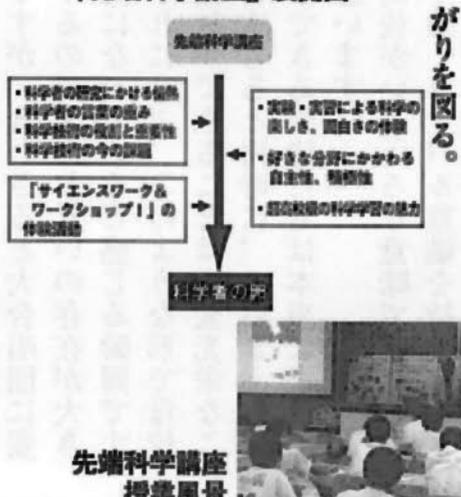
先端科学講座 授業風景

○科学技術に関する興味分野を発見し、二年次の課題研究への繋

「スーパーサイエンスハイスクール」全体像



「先端科学講座」展開図



○休日や長期休業日を利用して、各種研究施設を訪問し、体験活動を行う。



サイエンスワークショップI (核融合科学研究所)



サイエンスワークショップI (お茶の水女子大学)



SSH実験講座
(生命科学班)



SSH実験講座
(ロボット製作)



サイエンスワークショップII
(宇宙科学研究所)

1 ◆ SSH実験講座
 ○一クラス45名の生徒を、研究テーマ別に3グループ(生命科学班、ロボット製作班、宇宙天文班)に分け、各研究課題に取り組む。

「スーパーサイエンスII」展開図



3 ◆ サイエンスワークショップII
 ○長期休業日を利用して、各種研究施設を訪問し、体験活動を行う。



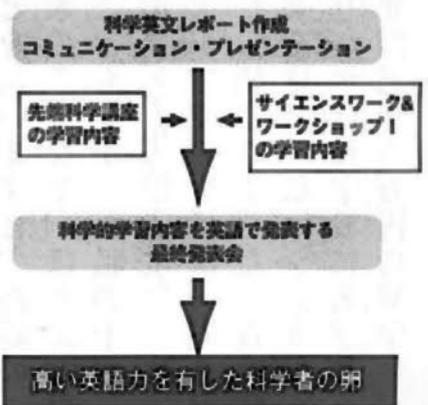
授業風景

2 ◆ SSH物理数学講座、SSH数学講座
 ○大学より講師を招き、各分野に関する講義を実施。



3 ◆ 科学プレゼンテーション英語講座
 ○外国人講師を招き、先端科学講座や研究所訪問で得た科学学習の成果を英文レポートに作成する技術や、英語によるコミュニケーション、プレゼンテーション能力を育成する。

「科学プレゼンテーション英語講座」展開図



SSHクラスは、科学に対する興味関心が高い生徒によって構成されており、前述のような特別な科学教育に対して、自主的、積極的に取り組んでいる。この学習姿勢は、他教科の学習においても十分に発揮され、学習活動全般に対して意欲的に取り組む姿が見られるようである。また、第一線で活躍する科学者から直接の面白さを伝えられることが、科学研究に対する関心を深めるとともに、各自の職業観の形成にも大きな参考となっている。

成果と今後への期待



サイエンスワークショップII
(地球シミュレーター)

2年生サイエンスワークショップII訪問先一覧

日程	訪問先	所在地
8月4日(月)	放射線医学総合研究所	千葉県千葉市
8月5日(火)	協和発酵工業研究所	東京都町田市
8月6日(水)	地球シミュレーター	神奈川県横浜
8月6日(水)	文部科学省宇宙科学研究所	神奈川県相模原市

1年生サイエンスワークショップI訪問先一覧

日程	訪問先	所在地
7月28日(月)	核融合科学研究所	岐阜県土岐市
	岡崎国立共同研究機構	愛知県岡崎市
7月29日(火)	岡崎高校	愛知県岡崎市
	日本車両製作所	愛知県豊川市
7月30日(水)	お茶の水女子大学	東京都文京区
	富士フィルム足柄工場	神奈川県足柄下郡
	東海大学工学部	神奈川県平塚市
	東海大学医学部	神奈川県伊勢原市
	風力発電所(東京風ぐるま)	東京都中央区豊洲
	東京みかど館	東京都江東区
7月31日(木)	紅の下水道館	東京都江東区
	有明船渠	東京都江東区
	東京大学高圧プラズマ研究センター	東京都文京区

今回の特集では、指定2年目を迎えたSSHについて、現状報告をさせていただいたが、この取り組みにも見られるように、母校高々は常に新たな挑戦を続けており、同窓諸兄の皆様には、高々の更なる発展を大いに期待していただきたい。なお、末尾ながら、SSHの取り組みにおいて、多くの同窓諸兄の御協力をいただき、同窓会としても紙面を借りて御礼申し上げる次第である。

現状では、まだ指定後2年を経過した段階で、次年度以降の取り組みもこれからの課題であるが、高々でのSSHの取り組みは、着実にその成果を上げていくようであり、文部科学大臣の視察を始め、全国の高校の注目するところとなっている。ここで学んだ生徒達が、高々の、さらには将来の日本のリーダーとして活躍するであろうことが大いに期待できであろう。

るようである。さらに、特定分野にこだわらずに様々な先端科学技術を授業内容として取り上げているため、科学技術全般に対する広範な知識が養われるとともに、外国人教師による授業により、英文でのレポート作成やプレゼンテーション能力も高まっているようである。確かに、休日を利用しての研究所訪問、その後のレポート作成など、平常の学習課題と並行しての取り組みは、生徒にとっては相当な負担であると思えるが、自己の興味ある分野の研究とあって、これらの生徒も本心に意欲的に諸活動に取り組んでいる姿が見られる。

海外の
同窓生

東南アジアに16年

諸江 修
(マレーシア在住)



高々を卒業した日が故郷・高崎からの旅立ちの日でした。一九八〇年四月からは京都に四年、神戸に三年、シンガポールに四年、ペナンに五年、クアラルンプールに七年とずっと高崎を離れて暮らしてきました。その間、何度か帰省し、家族や恩師、友人と再会を楽しんだこともありましたが、それも昔の思い出になってしまいました。

実は昨年、私の実家で四十年以上に渡って高崎で人形店を営んできた恵人形が倒産し、実家も銀行のものとなり、両親も高崎を離れ、もう帰る家が高崎には無くなってしまいました。いつの日か高崎駅に降り立っても、少年時代を過ごした街を感傷的な気持ちで歩くことができないうと思つたと心淋しい感じがします。

しかし私を知っている人ならば、「何を言っているんだ！好きで外国へ行って、そこに居着いているのに！」と言うことでしょう。本当のことを言いますと、高崎のことや実家のことなど、ほとんど思ひ出すこともなかった私の十六年間の東南アジア生活でした。

東南アジアでの生活は一九八七年六月から始まりました。宣教師になる夢を見て、私はシンガポールのトリニティ神学校に入学しました。年間三十六万円の奨学金が

唯一の収入の生活でした。清く正しく貧しく生きようと頑張りましたが、清貧の生活には馴染めませんでした。卒業後、政治的な理由で採用の決まっていたインドネシアの神学校の教師の道が閉ざされ、一年間就職浪人のような生活をシンガポールで送りました。

一九九一年六月、日系企業から誘いを受け、マレーシアのペナンに工場を建てるために、現地法人の雇われ社長となりました。土地を買って工場を建て、機械を据え付け、操業まで持っていくというエキサイティングな仕事でした。一九九五年九月に日本人女性と結婚。仕事も家庭も万事もまく行くかと思いましたが、本社の社長と大喧嘩をして、一九九六年三月に会社を辞めました。

もう二度と人に使われたくないとの思いから、その年の五月にクアラルンプールで会社を起こしました。たまたま趣味でやっていたコンピュータやインターネットが商売になると勧めてくれた人がいて、コンピュータの仕事を始めました。ITブームの時流に乗って商売は大成功しました。

しかしわが世の春は長くは続かず、新しい道を求め、二〇〇一年一月からコンサルタント会社を始めました。現在、法務、ビジネス関連

のコンサルタントの仕事をしています。

私は、所謂中小企業の親父ですので、自分で時間のアレンジができるということもあり、五年前にクアラルンプールの日本人会でグリークラブ(男声合唱)を設立し、団長を務めています。声楽の個人教授について、イタリア語やドイツ語の歌曲やオペラのアリアを勉強し、ここ五年、毎年リサイタルも行っています。また熱帯の蘭などの花の美しさに魅せられ、アマチュアの花の写真家もやっています。

高崎や高々のことを全く忘れてしまったわけではありません。もしできるなら桜の花の咲く頃、高々を訪ねてみたいと思っています。しかしまだ四十二歳の私には、ここマレーシアでやりたいことがたくさんありますので、未だ故郷は遠くにありにけり、なのかもしれません。

最後にこの場を借りて恐縮ですが、もしマレーシアに高々出身の方がおられたら是非ご連絡を下さい。そして長く音信不通になってしまった皆様からの連絡をお待ちしています。

なお、私のメールは、moree@sakura.net.myです。

(経営コンサルタント 79期)

同窓会だより

同窓会だより 1

模範翠巒会の集い

代表幹事 友松 稔

上毛三山の二つ標名山を、群馬町の平野部から眺めた姿は、とりわけ美しく見える。その群馬町と箕郷町を中心とした地域の、高中・高同窓生有志の集いが模範翠巒会である。

この会が発足したのは、昭和四十九年ごろのこと。四十四期に田島和夫氏がおられるが、田島氏が県の課長に就任されたのを機に、仲間たちが集まって祝賀会を開いたのがきっかけか。田島氏は、旧相馬村のご出身であったので、県道柏木沢線を中心に、三国街道や箕輪街道などを乗附まで通った者たちで、自然発生的に集いができたのであった。

最初は名称もなかったが、やがて「群馬郡西北部高中(高高)OB会」の名称もついた。いちばんの先輩は四十二期の人たち。前橋や高崎の酒処に、二十人ほどが年一回集まり、懇親を深めていたそうである。

会の噂を聞いて入会する者たちが増えてくると、会場を群馬町に移して開催するようになった。小生が初めて参加したのは、この頃のこと。以後、平成十三年まで、事務局を担当させていただいた。名称を「模範翠巒会」と決めたのは平成元年のことである。

その後しばらくは、五十三期までの有志が年一回集まった。最初に記念写真を撮り、飲んで食べてそして語って、最後に校歌や応援歌(翠巒)などを、肩を組んで声高らかに歌って散会して

いた。開催日時を毎年十一月の第二土曜としたのは平成九年からである。

しかし、こんなことを繰り返していたのでは発展性がないということでもっと若い会員を増やそうということになった。会場の都合もあり、五十八期までの地域出身OBに案内を発送して、会員の拡充を図った。

それと同時に、懇親会の前に研修会を実施することにしたのはよかった。十二年には七十六期の板垣仁氏に「成人病の予防について」を、十三年には五十三期の木暮繁俊氏に「県政よもやま話」を、そして十四年には五十期中島松男氏に「東京文学散歩よもやま話」の講話をしていただいて、たいへん好評であった。

ところで、高齢化の波は私たちも避けて通れず、この会には既に十一人の



物故者がいる。告別式には花輪を贈り、懇親会の前には黙禱をしているが、まことに寂しいかぎりである。

なお、昨年から事務局を五十二期の青柳貞夫氏にしていただいている。
(農業 49期)

同窓会だより 2

卒業五十周年の年(五十二期同期会)

岩崎 允彦

私たち五十二期は昭和二十八年(一九五三年)に高々を卒業したので、今年(二〇〇三年)はちょうど卒業五十周年にあたる。

そもそも、私たちは、戦中・戦後の教育制度の諸変転に毎回もろに巻き込まれてきた学年である。小学校は「国民学校」となり、私たちは「国民学校一年生」と歌われてその最初の入学生になった。

その五年生の夏に戦争は終わったが、六年生の秋には、先輩と同じように高中に入るつもりで受験勉強していた私たちは、突然、新しく創られる義務教育の中学の最初の一年生になるのだ、と告げられた。私たちが、高中の後身の高々に入れたのは、それから三年の後であり、それも三年間だけとなった。

憧れの高々生活も、しかし、一年生の冬に起きた校舎の大火のため、その後かなりの期間、あれやこれや不足と不便を免れなかった。

講堂を間仕切りした教室では、いくつもの授業の音が前後左右から同時に聞こえてきた。それでも、私たちは、勉学に、スポーツに、精一杯青春を謳歌し、この三年間を黄金色に輝かせてきた。熱い友情がわれわれを満たし、それは生涯にわたり続いている。

高々卒業後、私たちはいち早く五十二期の同窓会を作り、「新高会」

と名付けた。その音頭を取ってくれたのは山田博久君である。

同君は、毎年、定期的に同窓会総会の開催を実行し続けるとともに、ゴルフやその他の接触の機会も心がけてくれて、私たちが頻りに顔を合わせ、近況を語り合い、励まし合う場を作ってくれた。

また、高々野球部が勇躍甲子園に駒を進めたときは、他の同期会をしのご規模の拠金で、一躍五十二期の名を挙げた。山田君は、随分永く会長職を務めてくれたが、やがて、独り占めはいけないといって、席を岡村晶夫君に譲り、さらにその後は川鍋順一君、太田部保君などが跡を継いで、現在は深沢岩吉君が会長を務めている。

その深沢会長の音頭取りで、私たちは、この十一月、伊香保で盛大に卒業五十周年記念の同窓会総会を開くことになっている。例によって、前の晩の総会に加えて、翌日は希望者のためのゴルフが用意されている。この原稿が印刷されてそれまでに配布されていけば、この会のちょっとした話題ともなってくれよう。

高々卒業五十年を経て、私たちはなお十分壮健であり、第二・第三の人生でそれぞれに活躍しており、互いの友情はますます厚いものとなっている。

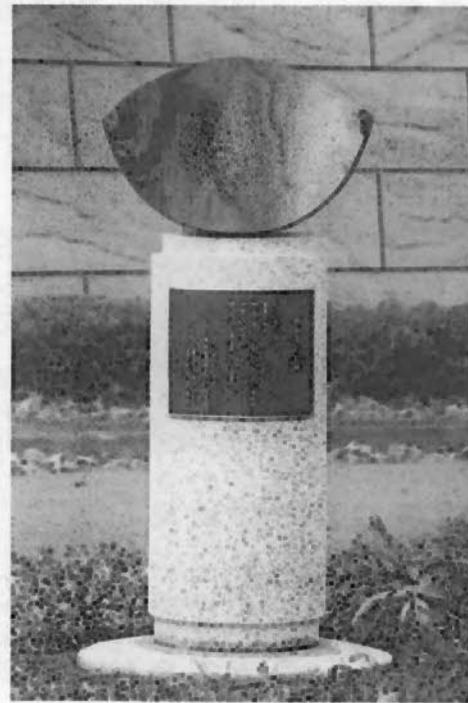
(上武大学教授 52期)



◆五十四期卒業五十年モニュメント

「熱き思いの碑」を母校へ

前号で工事進行中と紹介しました五十四期の卒業五十年モニュメントの建設事業は、昨年本体が設置され、その除幕式・贈呈式が行われました。その後周辺の修景工事が行われて今年春終了しました。



このモニュメントは、同期で日本石彫界の第一人者半田富久氏の作品「おっす！」を一・二メートルの台座上に載せたもので、台座には同期の吉永哲郎氏の撰文による「熱き思いの碑」ここに佇むと／薔薇の香が／裸足で走ったグラウンドが／目に浮かぶ／卒業して半世紀／消えやらぬ熱き思いは／永遠に」が刻まれた銅板がはめこまれております。指月庭の大ケヤキの下にスツクと立っておりますので、ご来校の節にはご覧下さい。

◆植原先生が急逝

本部幹事として同窓会の実務にお力を貸して下さっていた母校の植原政明先生が、今年七月十六日病気のため急逝されました。植原先生は第六十九期の卒業生で、平成三年四月に母校に赴任され世界史を担当すると共に、同窓会会務にも積極的に携わってくれました。特に、母校創立百周年事業での「高崎高校百年史」刊行においては、人物誌「翠巒の群像」の取りまとめ役として奮闘されました。今後も校内の同窓生のリーダーとしてご活躍を期待しておりましただけに残念です。ご冥福をお祈りいたします。

◆田島創志君(94期)

「PGAツアー久光製薬KBCオーガスタ」で優勝

八月二十八日から四日間、福岡県芥屋GCで行われたプロゴルフツアー久光製薬KBCオーガスタで、第九十四期卒業生の田島創志君が初日から首位を守り続けて、通算19アンダー、269でツアー初優勝を果たしました。



田島君は昭和五十一年生まれの二十七歳。高崎片岡中学出身、本校から日本大学へ進み、平成十二年プロ入りしました。本校同窓生のプロスポーツにおける優勝は初めての快挙だと思えます。本当におめでとうございました。今後なお一層のご活躍をお祈りいたします。

◆翠巒セミナー

本年度の翠巒セミナーは左記のとおり翠巒会館にて催され好評でした。

●第一回 六月十四日(土)

「体験的ジャーナリズム論」

毎日新聞論説委員 松田 喬和(六三期)氏

日本政治とマスコミとの関係についての講演

●第二回 十一月一日(土)

「私のラグビー人生」

日本ラグビーフットボール協会専務理事 真下 昇(五六期)氏

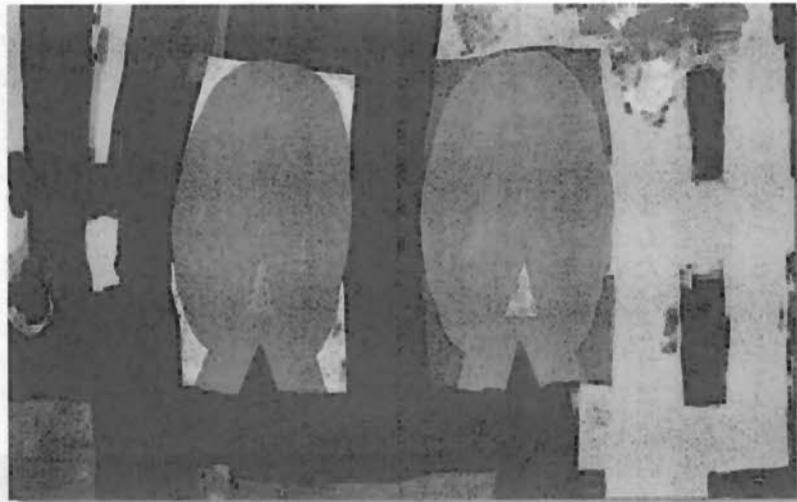
高高の1年生より始めたラグビーのことを中心に日本のラグビーの展望についての講演

卒業生の作品紹介19



福田

(60期) 篤



『森の昼と夜』

ここ数年、森のシリーズに取り組んでいる、この作品は、昨秋私が所属している自由美術展で発表した。余談になるがこの会が高々の大先輩の山口薫氏がフランス留学から帰って間もなく当時の進歩的な仲間と創立した会である。戦争へ傾斜してゆく昭和十二年に「自由」という名の会を創り全国公募をしたことの意味は大きく、又、氏の理想の高さと純粋さに改めて感心する。

さて私はというと若年よりその会に所属し抽象的

表現形式をとってきた。しかし、その元は風景や人といった具体的イメージに基づいて、抽象的に構成し造形的簡潔性を求めてきた。

この森というテーマは、人類の文明を問うことにある。ギルガメシュ神話で問われながらも、今に至る迄走り続けてきた文明はある意味で最終章に入ったと見ることができる。そして今呑気に構えながらも森に思いをはせている私である。

(自由美術協会会員・日大芸術学部講師)

翠戀文庫 BOOK

●著書

- 躍進するフラッシュメモリ
- 超光速粒子タキオン
- 分部順治作品集
- 私の昭和町
- 十石犬物語
- 力と機転と胃袋と
- 万葉歌人 大伴家持

●作者

- 舛岡富士雄(61期)
- 本間 三郎(53期)
- 分部 順治(27期)
- 峰岸 達(64期)
- 橘 不折
(太田節也)(62期)
- 清水 眞一(47期)
- 廣川 晶輝(85期)

●著書

- 文明の未来、その扉を開く
- 安田繁穂作品集 絆を尊ぶ
- 土屋文明書簡集
- ひび割れた地図
- 十七歳
- エキソ音楽超特急
- 戦争と救済の文明史

●作者

- 黒石 普(76期)
- 安田 繁三(30期)
- 土屋 文明(8期)
- 関根 正史(69期)
- 門倉まさる(56期)
- サラーム海上(84期)
(海上卓也)
- 井上 忠男(70期)

平成十五年度 褒章・叙勲受章者 (敬称略)

- 〈春〉 藍 綬 褒 章(保健衛生) 56期 桜井 弘(64歳) ……県接骨師会会長
勲五等双光旭日章(地方自治功勞) 45期 大熊辰夫(74歳) ……元県企業局技監
- 〈秋〉 旭 日 中 綬 章(地方自治功勞) 49期 橋爪和夫(72歳) ……元県議会議員

- 〈大臣表彰〉平成15年度学校保健及び学校安全文部科学大臣表彰(学校保健関係) 47期 中沢董之(73歳) ……学校医
- 平成15年度国土交通大臣表彰 56期 三浦文雄(64歳) ……三富運送(株)代表取締役
- 平成15年度厚生労働大臣表彰 58期 鈴木行正(62歳) ……柔道整復師
- 平成15年度教育者文部科学大臣表彰 小林克茂(59歳) ……現校長

(注) もし漏れがありましたら、恐縮ですがご連絡ください。

母校だより

各部の活躍・活動

バスケットボール部

我々バスケット部は、あきらかに県内の四強の中で経験、技量ともに劣っていましたが先生の指導の下、協心の精神で頑張った結果、念願であったインターハイへの切符を得ることができました。

インターハイでは残念なことに自分の目標は達成することができませんでしたが、あの言葉には表すことのできない緊張感や、群馬とは全く異なる舞台で、自分達の持てる限りのバスケットボールができたことはとても良い経験になりました。

来年度は後輩達がさらなる飛躍をめ

ざし切磋琢磨しあっているもので、期待しててください。



金井 隆太郎

ソフトテニス部

我々ソフトテニス部は、今年二十一年ぶりにインターハイ団体出場という成績を残すことができました。これは試合に出た選手だけでなく、応援を含めて全員が一つになれた結果でした。

我が部は、個人戦は勝てるのにどうしても団体戦で勝てないという時期が続きました。しかしその壁を最後に越えられた事はとてもいい思い出です。インターハイでは、やはり全国の壁は厚く、初戦敗退となってしまいました。が、この雪辱は後輩がきつと晴らしてくれと思います。終わりにりましたが、僕達がこのような成績を残せたのもみなさんの御支援、御声援があったの事だと思っています。ありがとうございます。

ございました。

これからの高崎高校ソフトテニス部の活躍に是非、期待していただければと思います。



丸岡 哲也

SPORTS 運動部

- ①県総合体育大会
- ②関東大会
- ③インターハイ予選
- ④全国高校総体
- ⑤国体
- ⑥県新人大会
- ⑦その他の大会

空手道部

- ①個人形 松本照林 決勝進出
団体組手
1回戦 高崎3-2健大高崎
2回戦 高崎2-3沼田
- ③団体組手
1回戦 高崎2-2前橋商
(ポイント勝ち)
- 2回戦 高崎2-3中之条
- ⑥個人形 松本照林 決勝進出
個人組手 松本照林 ベスト8
団体組手
1回戦 高崎3-2館林
2回戦 高崎2-3前橋

剣道部

- ①2回戦 高崎4-0明和県央
3回戦 高崎4-1育英
4回戦 高崎0-3前橋 ベスト8
- ③2回戦 高崎5-0桐生西
3回戦 高崎5-0明和県央
4回戦 高崎2-2吉井
(代表戦で勝ち) 3位入賞
- ⑥2回戦 高崎5-0前橋南
3回戦 高崎4-0桐生
4回戦 高崎0-2前橋西 ベスト8

⑦県選手権大会

金井友宏 個人戦 ベスト8

弓道部

- ①予選敗退
- ③予選敗退
- ⑦関東個人選手権選抜大会県予選会 大坂亮司 7位 関東大会出場

硬式野球部

- 春季関東地区高校野球大会群馬県予選
2回戦 高崎3-2太田東
3回戦 高崎2-5桐生
全国高等学校野球選手権大会群馬県大会
- 2回戦 高崎6-2尾瀬
3回戦 高崎3-2前橋工
4回戦 高崎4-5太田 ベスト16
- 秋季関東地区高校野球大会群馬県予選
2回戦 高崎6-3明和県央
3回戦 高崎6-4樹徳
4回戦 高崎0-7桐生 ベスト16
- 一年生強化試合
県大会初出場
- 1回戦 高崎5-2市立伊勢崎
2回戦 高崎3-4太田市商
3位決定戦 高崎15-0高崎工 第3位

サッカー部

- ①4回戦 高崎3-1桐生南
準々決勝 高崎0-3前橋育英 ベスト8
- ③4回戦 高崎1-0桐生一
準々決勝 高崎0-1高経附
(延長) ベスト8
- ⑤中町公祐 群馬県選抜として出場
決勝 群馬0-2神奈川 準優勝
- ⑥平成16年1月から開催
- ⑦県高校サッカー選手権大会

一次予選シード
二次リーグ 高崎1-0桐生商
高崎1-3前橋
高崎0-6前橋育英
(二次リーグ敗退)

県高校サッカーリーグ(一部)
第3節まで終了(4-7節は12月実施)
第1節 高崎4-1桐生
第2節 高崎4-1桐生一
第3節 高崎0-1太田商

山岳部

① 8位
② 出場
⑤ 縦走の部 総合成績 5位入賞
日部貴博 10位
柴山大寿 11位

⑦ 県民体育大会第2部山岳競技会
縦走の部 日部貴博 1位
柴山大寿 2位
日部貴博 3位
柴山大寿 4位

国民体育大会関東ブロック大会
縦走の部 団体 2位
日部貴博 2位
柴山大寿 4位

総合成績 団体1位 本国体出場権獲得

柔道部

① 団体 ベスト8
② 団体 ベスト16 (優秀校表彰)
③ 団体 3位
個人 60kg級 芹澤 2位
66kg級 中野 3位
81kg級 松嶋 優勝
81kg級 松嶋 出場
④ 個人 3位
⑥ 団体 3位
⑦ 全国高校選手権県大会予選

団体 3位 (※15年1月)

水泳部

① 五十m自由形 今泉裕太 1位
中間貴之 3位

百m自由形 今泉裕太 3位
紋谷祐爾 7位

二百m自由形 紋谷祐爾 8位
千五百m自由形 白井克尚 7位

二百m平泳ぎ 深津知由 8位
二百m個人メドレー 費田高弘 1位
(大会新)

四百m個人メドレー 福田裕紀 8位
四百mリレー 2位 費田高弘 1位

八百mリレー 3位 (福田・費田・紋谷・中間)

四百mメドレーリレー 4位 (費田・中間・福田・今泉)

学校対抗 第3位 福田裕紀 出場
五十m自由形 今泉裕太 出場

百m自由形 今泉裕太 出場
二百mバタフライ 費田高弘 出場

四百m個人メドレー 費田高弘 出場
四百mメドレーリレー 出場 (費田・中間・福田・今泉)

四百mリレー 出場 (費田・福田・紋谷・今泉)

八百mリレー 出場 (費田・今泉・紋谷・福田)

四百m個人メドレー 費田高弘 11位
四百m個人メドレー少年A 費田高弘 8位

男子二百m混合リレー 今泉裕太 4位
春季新人水泳大会 五十mバタフライ 大島卓也 1位

五十m自由形 中間貴之 1位
福田裕紀 2位
大島卓也 3位
白井克尚 5位
飯野恵太 5位

百m自由形 中間貴之 1位
白井克尚 4位
飯野恵太 7位
二百m平泳ぎ 飯野恵太 7位
二百m個人メドレー 福田裕紀 4位
白井克尚 5位

県高校新人大会
五十m自由形 中間貴之 1位
紋谷祐爾 2位
大島卓也 5位

百m自由形 紋谷祐爾 2位
大島卓也 6位
百m平泳ぎ 中間貴之 2位
飯野恵太 2位
入沢 毅 6位

百mバタフライ 佐俣友規 6位
二百m個人メドレー 白井克尚 4位
四百mメドレーリレー 1位 (白井・中間・大島・紋谷)

四百mリレー 1位 (紋谷・白井・中間・大島)

八百mリレー 1位 (紋谷・白井・中間・大島)

⑦ 全日本選手権 四百m個人メドレー 費田高弘 出場

スキー・スケート部

① 回転 園田悠樹 11位
大回転 園田悠樹 13位
(インターハイ予選を兼ねる)

② 大回転 園田悠樹 19位
⑤ 県予選 少年男子 園田悠樹 12位
⑦ 春季選手権大会 回転 園田悠樹 6位

大回転 園田悠樹 15位

ソフトテニス部

① 団体 4位
個人 徳安・相澤組 2位
斉藤・土岐組 3位
小林・丸岡組 3位
根岸・野尻組 ベスト16
(以上4組関東へ)

② 個人 徳安・相澤組 ベスト16(5回戦)
小林・丸岡組 ベスト32(4回戦)

③ 団体 優勝 徳安・相澤組 8位
④ 団体 1回戦 高崎1-2高知小津 準優勝

⑤ 個人 清水・長野組 ベスト16
根岸・野尻組 ベスト16
植松・今井組 ベスト16
今林・村上組 ベスト16

⑦ ハイスクールジャパンカップ予選 県1年生大会 個人 斉藤・土岐組 優勝
個人 片山・木村組 優勝
植松・今井組 準優勝

卓球部

① 団体 7位
③ 団体 ベスト16
⑥ 団体 ベスト16
⑦ 県強化大会 シングルス 武井 悠 ベスト16
田村 崇 ベスト64

テニス部

- ① 団体 4位
個人シングルス 矢川雄太 3位
個人ダブルス 井上・佐々木組 ベスト8
- ② 個人シングルス 矢川雄太 出場
- ③ 団体 3位
個人シングルス 橘 直明 ベスト8
個人ダブルス 橘・松原組 ベスト8
- ⑥ 団体 ベスト8
個人ダブルス 狩野・串田組 ベスト8

軟式野球部

- ① 2回戦 高崎4-3 高崎商
準々決勝 高崎9-3 農大二
準決勝 高崎5-0 桐生
決勝 高崎2-9 前橋商 準優勝
- ③ 2回戦 高崎3-0 高崎工
準々決勝 高崎2-4 農大二 ベスト8
- ⑥ 2回戦 高崎4-3 農大二
準々決勝 高崎6-0 中央
準決勝 高崎2-6 前橋商 3位

バスケット部

- ① 1回戦 高崎78-23 渋川
2回戦 高崎87-43 太田東
3回戦 高崎133-58 桐生工
準々決勝 高崎105-69 太田工
準決勝 高崎72-85 樹徳 3位
- ② 1回戦 高崎57-75 国学院久我山(東京)
- ③ 1回戦 高崎126-16 藤岡工
2回戦 高崎93-35 渋川工
3回戦 高崎94-66 前橋
準々決勝 高崎111-72 桐生
準決勝 高崎89-75 高崎商
決勝 高崎80-61 樹徳 優勝
- (長崎インターハイ出場)
- ④ 1回戦 高崎74-93 中部工業(沖縄)
- ⑥ 西毛地区高校新人大会
1回戦 高崎85-43 高経附

- 2回戦 高崎122-42 健大高崎
- 3回戦 高崎141-54 高崎東
- 決勝 高崎77-109 高崎商 2位
- 群馬県高等学校新人大会
- 1回戦 高崎99-23 渋川工
- 2回戦 高崎115-46 中央
- 3回戦 高崎84-50 伊勢崎東
- 準々決勝 高崎94-65 樹徳
- 決勝リーグ 高崎92-68 前橋商
- 高崎83-53 沼田
- 高崎96-101 高崎商

バレーボール部

- ⑦ ウィンターカップ予選
準々決勝 高崎118-75 沼田
準決勝 高崎79-75 前橋育英
決勝 高崎70-93 高崎商 準優勝

陸上部

- ① 4回戦 高崎2-0 樹徳
準々決勝 高崎2-1 太田東
準決勝 高崎0-2 伊勢崎東 3位
- ② 1回戦 高崎1-2 東京学館総合(千葉)
- ③ 3回戦 高崎2-0 伊勢崎商
準々決勝 高崎2-0 前橋育英
準決勝 高崎0-2 桐生商 3位
- ⑦ 西毛地区大会
1回戦 高崎2-0 高崎東
準決勝 高崎2-0 吉井
決勝 高崎2-0 高崎北 優勝

ラグビー部

- ① 準々決勝 高崎0-65 樹徳 5位
- ③ 準々決勝 高崎3-60 農大二 5位
- ⑥ 平成16年1、2月開催

陸上部

- ① ③ 四百m 藤井 裕 8位
- 八百m 小杉健 7位/藤井裕 8位
- 千五百m 飯塚淳司 3位/関敏則 4位
- 五千m 関 敏則 2位

三千mSC 飯塚淳司 2位

やり投 片山裕之 2位/高田裕弥 6位

円盤投 片山裕之 2位

砲丸投 片山裕之 6位

走幅跳 福田裕介 8位

八種競技 福田裕介 6位

総合 5位

駅伝 3位(前小杉飯塚橋本狩野星野梓田)

② 千五百m 関 敏則 7位

五千m 関 敏則 8位

やり投 高田裕弥 5位

円盤投 片山裕之 1位

④ 円盤投 片山裕之 予選落

やり投 高田裕弥 予選落

⑤ 円盤投 片山裕之 予選落

⑥ 千五百m 小杉健 3位/星野慎也 5位

五千m 長崎樹 1位/星野慎也 4位

走幅跳 谷岡一誠 3位

砲丸投 田村 司 8位

四×四百mリレー 8位

⑦ 関東選抜新人
五千mW 長崎樹 1位

関東選手権大会
五千m 関 敏則 1位

バドミントン部

- ① 団体 1回戦 高崎1-2 農大二
個人シングルス
- 4回戦 高橋千春
- 3回戦 清水、田島、高橋卓、落合、三世川
個人ダブルス
- 4回戦 遠藤・田島組
- 3回戦 狩野・清水組、大山・高橋組
- ③ 団体 1回戦 高崎3-1 渋川
2回戦 高崎1-3 太田
- ⑥ 1年生大会 4回戦
倉林、秋池、綾小路、水口、大久保、滝川、藤原
シングルス 3回戦
三世川、金田、落合、安藤、福田
ダブルス 5回戦 高橋・落合組 ベスト16

団体 11月15日(土)開催

⑦ 高校生大会
高橋千春 準優勝

学芸部

将棋・囲碁部

- 〔将棋〕
○群馬県高等学校将棋選手権
団体 準優勝(栗本・竹村・多胡)
- 全国高等学校将棋竜王戦群馬県大会
個人 栗本智也 ベスト4
個人 多胡泰之 ベスト8
- 〔囲碁〕
○全国高校囲碁選手権大会群馬県大会参加
- 関東高校囲碁選手権大会群馬県大会参加

吹奏楽部

- 県吹奏楽コンクール A組 銀賞

鉄道研究部

- 九月二十一日(日)
群馬公共交通フェアに
鉄道ジオラマを出展
- 十月四日(土)・五日(日)
高崎市問屋街シランバザールに
鉄道ジオラマを出展

新聞部

- 群馬県高校新聞コンクール
県知事賞受賞

美術部

- 全国高校新聞年間紙面審査賞 佳作
- 高崎芸術祭
美術部門 内海裕一郎 優秀賞

第57回定期戦

「永田、来年こそ俺達の雪辱をなんとしても晴らしてくれ」、そう言った塚本実行委員長と「必ず勝って、塚本さんに勝利杯でメシを食わせてやる」と誓ったあの日から一年。第57回定期戦は我々が21-12と前高をリードし、決戦の日、十月四日を迎えた。

ホームで行われた今年の定期戦。一般対抗の綱引きや玉入れで完敗するなど想像を絶する大苦戦を強いられたが、部対抗が県総体二位の実力を発揮し、48-36で前高に勝利した。これも偏に奮闘してくれた高生をはじめ、先生方、さらにはこの定期戦を支えてくれた多くの人の御尽力の賜である。この場を借り、その人達に感謝の意を表したい。

自分は三年間、この定期戦に関わってきた。その中には今年のように勝利に酔い痴れた年もあったし、鳥川で目を眺め、涙にくれた年もあった。しかし、今振り返ってみると、全力で勝負に挑み、勝利あるいは敗北し、友と共に心から笑い、そして泣いたことは、自分にとって何よりも掛替えのないもののように思える。そんな素晴らしいものを自分にくれた定期戦にも、我が母校高高にも、今、心から感謝したい。

(第57回定期戦実行委員長 永田 和也)

進路状況 (全日制) ()内は現役

大学	年次	13年	14年	15年	大学	年次	13年	14年	15年
北大		8(4)	6(5)	7(6)	慶應大		55(46)	64(42)	36(21)
東北大		19(15)	21(18)	23(16)	早稲田大		64(49)	66(39)	53(33)
筑波大		8(7)	3(2)	3(1)	中央大		52(41)	60(51)	47(33)
千葉大		5(3)	3(3)	8(7)	明治大		63(46)	53(43)	45(30)
群馬大		28(25)	15(13)	23(16)	上智大		7(5)	6(3)	9(3)
(医)		9(6)	6(4)	5(4)	立教大		19(16)	19(10)	19(14)
埼玉大		3(2)	8(8)	4(1)	学習院大		11(8)	7(4)	2(0)
東京大		17(16)	15(12)	12(7)	青山学院大		13(10)	13(13)	16(12)
一橋大		2(2)	6(2)	0(0)	法政大		35(28)	33(27)	25(19)
東工大		3(3)	11(4)	1(1)	日本大		37(30)	51(46)	53(36)
横国大		9(6)	5(5)	7(7)	東京理科大		93(70)	85(65)	75(54)
新潟大		13(11)	13(13)	15(10)	芝浦工業大		28(24)	22(21)	44(36)
金沢大		7(7)	7(6)	7(5)	同志社大		4(1)	2(2)	5(5)
信州大		1(1)	2(1)	1(0)	立命館大		28(25)	22(21)	27(21)
名古屋大		4(4)	1(0)	4(4)	高経大		5(5)	8(6)	11(7)
京都大		3(3)	4(2)	3(2)					

第57回定期戦得点表

部対抗		種目	一般対抗	
高高	前高		高高	前高
対抗	対抗	水泳	9	0
		駅伝	6	3
		綱引き	0	9
		玉入れ	0	9
		ソフトボール	3	6
		卓球	4	5
		陸上競技	3	6
		ソフトテニス	3	6
		バレーボール	5	4
		バスケットボール	8	1
0	6	柔道	対抗	対抗
6	0	剣道		
0	6	弓道		
6	0	空手道		
0	6	サッカー		
6	0	ラグビー		
0	6	硬式野球		
6	0	軟式野球		
6	0	硬式テニス		
48	36	小計		
89	高	総合	前高	85

人事異動 (平成15年度)

退任者・転出者

教頭 大崎博章 前橋南高等学校 校長へ

事務部長 外山嘉男 (高崎保険福祉事務所)へ 退任

地理 中村博昭 退任

保健体育 立見賢治 万場高等学校 教頭へ

化学 金井明 吉井高等学校へ

生物 柴田栄 尾瀬高等学校へ

保健体育 清水明宏 富岡東高等学校へ

転任者

教頭 富所三郎 前橋南高等学校より

事務部長 八木勝利 前橋清陵高等学校より

地理 内田均 桐生高等学校より

化学 中村健一 富岡高等学校より

保健体育 長竹潤 沼田高等学校より

生物 諏訪賢一 伊勢崎東高等学校より



高高同窓会 予算決算報告

費目	平成14年度予算	平成14年度実収入	備考
前年度からの繰越金	2,399,169	2,399,169	
入会金	3,000,000	2,943,000	360人
維持会費	6,000,000	6,636,380	2,406人
利息	1,831	429	
雑収入	10,000	741,883	100年史代金・ネクタイピン代等
合計	11,411,000	12,720,861	

費目	平成14年度予算	平成14年度実支出	備考
会議費	1,000,000	820,445	平成15年度総会補助30万円他
祝賀費	800,000	601,505	ネクタイピン・卒業証書九折・祝儀者記念品代
送別費	300,000	150,000	平成14年転退職員へ
慶弔費	200,000	37,000	葬儀花輪代等
通信印刷費	500,000	372,391	維持会費納入礼状、電話代、郵送料等
旅費	100,000	70,000	東京同窓会出席者等
会報発送費	2,000,000	1,773,852	
同窓会報費	1,000,000	712,897	
事務費	1,800,000	1,229,647	人件費、事務用品代等
同窓会長賞費	200,000	55,503	文額代
補助費	600,000	600,000	図書館、翠樹体育会へ各30万円
雑費	300,000	148,215	維持会費振込手数料・広告代等
予備費	2,611,000	1,556,780	指月庭整備・事務室パソコン
合計	11,411,000	8,128,235	

差引残高 4,592,626円

費目	平成15年度予算	前年度予算	増△減	備考
前年度からの繰越金	592,626	2,399,169	△1,806,543	
入会金	3,000,000	3,000,000	0	
維持会費	6,000,000	6,000,000	0	
利息	374	1,831	△1,457	
雑収入	10,000	10,000	0	
合計	9,603,000	11,411,000	△1,808,000	

費目	平成15年度予算	前年度予算	増△減	備考
会議費	1,000,000	1,000,000	0	新年総会準備金他
祝賀費	800,000	800,000	0	
送別費	300,000	300,000	0	
慶弔費	200,000	200,000	0	
通信印刷費	500,000	500,000	0	
旅費	100,000	100,000	0	
会報発送費	2,000,000	2,000,000	0	
同窓会報費	1,000,000	1,000,000	0	
事務費	1,500,000	1,800,000	△300,000	
同窓会長賞費	200,000	200,000	0	
補助費	600,000	600,000	0	翠樹体育会・図書館
環境整備費	500,000	—	500,000	新規(指月庭整備)
雑費	300,000	300,000	0	
予備費	603,000	2,611,000	△2,008,000	
合計	9,603,000	11,411,000	△1,808,000	

特別会計積立

収入の部	前年度からの繰越金	金額
	平成13年度通常会計より	4,510,699
	利息	3,700,000
	合計	963
支出の部	なし	8,211,662
	差引残高	8,211,662円

特別会計積立

収入の部	支出の部
前年度からの繰越金	なし
平成14年度通常会計より	
利息	
合計	

※なお、通常会計より、100万円を翠樹育英会へ寄付

第102回高高同窓会新年総会のご案内

同窓生の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。今回の新年総会は、私達73期が担当させていただくこととなりました。心に残る新年総会になることを目標に、諸先輩のご指導、ご助言を仰ぎながら準備を進めてまいります。懇親会も、楽しい会になるように企画の準備を進めておりますので、期待ください。

同日の方々、先輩後輩の方々お誘い合わせのうえ一人でも多くの、同窓生の皆様のご出席を心よりお待ちしております。

期日 平成十六年一月二十四日(土)
時間 午後三時より
場所 高崎ビューホテル
会費 五千円
(当番期73期代表 重田 誠)

第10回 高崎高校同窓会ゴルフ大会結果報告

平成15年6月1日(日)午前8時から66期を幹事期として、伊香保ゴルフ倶楽部岡崎城コースにて第10回高崎高校同窓会ゴルフ大会が開催されました。横田英一同窓会長をはじめ148名が大会に参加され、午前中は台風の余韻を残す雨の中にもかかわらず、老いも若きも和気藹々の雰囲気で行われました。優勝は中島文明氏でした。スタートコース毎のベストブローは、後藤次一氏78、堀康高氏76、川倉宏之氏78でした。各コース6番のニアピンホールではチャリティが行われ、参加者はころよくチャリティに応じて頂きました。この収益金は翠樹育英会へ寄贈されました。(小林優公66期)



順位	氏名	OUT	IN	GROSS	HDCP	NET
優勝	中島 文明 (72期)	41	40	81	10.8	70.2
準優勝	茂原 吉郎 (71期)	42	38	80	9.6	70.4
第3位	松岡 誠一 (67期)	46	44	90	18.2	70.8
第4位	藤井 行雄 (66期)	48	40	88	16.8	71.2
第5位	長井 紀夫 (66期)	44	49	93	21.6	71.4

○維持会費の納入について
平成16年度の維持会費の納入をお願い致します。納入については、同封の振込取扱票(加入者名一群馬県立高崎高等学校同窓会)をお使いください。詳細については振込取扱票の裏面に記載してありますので、よく御覧ください。

■編集後記
同窓の皆様の多大なる御協力をいただき、会報37号が発刊できました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。
御多忙の中、貴重な原稿やお写真をお寄せ下さいまして、まことにありがとうございました。
(本部幹事会)